



生物多様性インタビュー

C. W. ニコル さん

財団法人 C. W. ニコル・アフアの森財団理事長
作家、環境保護活動家、探検家



長野県北端の飯綱山のふもと、上信越高原国立公園の程近くにニコルさんたちが運営する“アフアの森”があります。アフアとはケルト語で「野いちごがなる場所」、「風の吹きぬける場所」を意味し、その言葉どおり、よく管理された森には太陽の光が燦燦と降り注ぎ、たくさんの生き物を育てています。

2010年12月、師走とは思えない穏やかな日に、ニコルさんにアフアの森を案内してもらいました。

◆ 「アフアの森」のはじまりについて、教えてくださいませんか。

私は英国のウェールズ生まれですが、小さい頃あまり体が強くなかったので、いじめられることがありました。落ち込んでいる時、おばあさんに「あその丘に大きな木があるから、嫌なことがあれば話をしておいで」と言われ、実際に木の根元に行って話しかけることでフラストレーションを抑えることができました。成長するにつれ体が丈夫になり、視野も広がりました。小さな頃に自然に救われたという体験を今でも忘れません。

どうして「アフアの森」を作ったのか。それは、日本の森に救われたから、日本の森に恩返しをするためです。

英国と日本を比べると、同じ島国、同じ人口密度、同じ文明国なのですが、里山の利用形態を見ると少し違いがあります。英国では主に上流階級の貴族がハンティング・フィールドとして利用していました。日本では庶民が山菜を採ったり、ハンティングをしたり、人と自然がかなり融合していて、大型哺乳類のクマやイノシシなどが闊歩している森が広がっているというところに凄く驚きました。また、ひとつの国土に北には流氷、南にはサンゴ礁が見られ、2種類のクマが棲息している、世にも稀に見る自然が多様な国だと感動しました。

しかし、30年ほど前になりますが、私が日本に定住するようになって、ブナ林をはじめとする天然林がどんどん伐採される現場を見る訳です。実は日本に定住する前に、エチオピアへ国立公園を作る公園長として赴きましたが、山賊を抑えて森を整備したら水源が復活したんです。麓で生活している人たちにとって豊かな森でした。でも、国の情勢が悪くなって再び山賊が横行すると、森が荒れて麓の人々の暮らしが駄目になるという現実をまじまじと見ました。

日本に帰ってきて、日本が自国の政策として天然林をバンバン伐るのがどうしても許せませんでした。散々日本がやるのが駄目だとストップをかけたんですけど、日本は動きませんでした。

私が絶望を感じている時に、故郷のウェールズが森を再生したよという連絡が来たんです。ウェールズでは、かつて石炭を採掘していましたが、この頃ボタ山が崩れて小学校を1校丸呑みにする大きな事故がありました。その事故を受けて、学校の先生3人が丘の上10haの土地を借り、バケツ一杯の土を持って苗木を運び植栽を始めたんです。その運動が広がって



現在 3 万 ha を越え、ウェールズの国立公園になっています。そこが「アフアン・アルゴード森林公園」です。その運動に感銘して、日本でも諦めずに行動を起こそうということになりました。私は、自分の家を建てるために貯めたお金を全部使って黒姫の土地を買いはじめました。「アフアンの森」の名は、私を奮い立たせてくれたウェールズの森林公園にちなんでつけたものです。

もともとアフアンの森の土地は国有林でした。戦後、森林を皆伐した後、満州から引き上げてきた人の開拓地として安価で売り払われました。傾斜地は割りと薪炭林として利用され、現在残っているナラの太いのはその時に植えられたみたいです。ちょっとした平地は、牧草地にも使われていたようです。そういう利用のされ方をしていましたが、石油が入ってきて放置されました。ですから、私が黒姫に居を定めた 1980 年代、このあたりはものすごい藪だったんです。

◆ 放置された森林をどのように再生されたのですか。

アフアンの森は、一度人の手が入った後、放置されたところなので、もう一度人が手を入れることで本来のあるべき姿に戻そう、将来は天然更新するような巨木が点在する森林にして、麓の方は里山のようにする、そんなイメージを持ちながらずっと手を入れ続けています。その際、大事にしていることは、ダイバーシティ（生物の多様性）、プロダクティビティ（生産性）、バランス（均衡感覚）の 3 つの観点です。これは 30 年前から言っています。生物多様性条約第 10 回締約国会議（COP10）でも SATOYAMA イニシアティブで言っているんですから、3 つの観点を利用しないと駄目だと思います。

森林の再生は、最初から自分の力だけじゃ駄目だと分かっていたので、地元出身の松木さんを口説いて仲間になってもらいました。松木さんは、森のことなら何でも知っています。小さい頃から父親の炭焼きを手伝っていて、15 歳の時には一人で山に入り炭焼き作業をしています。間もなくして本式に樵になり、林業に携わりました。あらゆる植物の名前と生態を知っているばかりか、人間にどう利用されてきたか、クマや鳥に好まれるのはどの種類かまで知っています。松木さんの凄さについて一つ例を挙げると、これは冬期のウサギ猟ですが、まずスギなどの高木の下枝を鉋で伐り落として形を整えます。ウサギがいそうな藪は、事前に沢の上から足跡を見て確認しますが、その藪めがけて棒を投げるとタカの羽のような音がします。その音に、ウサギがパニックになり藪から飛び出して雪の中に潜り込みます。そこにさっと走って行って素手でウサギを捕まえます。銃は一切使いません。私は、クチンとかイヌイットとかサーリッシュとか、いろんな少数民族と暮らした経験がありますが、松木さんには彼らに負けないテクニックがあります。

私と松木さんのコンビネーションが良かったと私だけが思うのじゃなくて、どろ亀先生ってご存知ですか。高橋延清先生です。富良野の東京大学付属北海道演習林の面倒を 36 年間ずっと見ていた人です。私のことを「わしの馬鹿息子」と言って可愛がってくれました。何回かどろ亀先生がここに来てアドバイスをしてくれました。亡くなる一年前に来て、「赤鬼君、この森に一番大事なことは何だか分かるかい。松木さんと赤鬼君がいつも議論している、それが大事なんだ」とアドバイスをしてくれました。ですから、理想のある若者が地元の堅物と付き合うことはすごく大事です。ずっと話して議論すればいいのです。私は後どれぐらい生きられるか分からないけれど、死ぬまでずっと松木さんと笑いながら議論し続けます。

話をもとに戻しましょう。この森で行っている森林再生の方法が、全国的に正解だという



気は全然ありません。ここで行ってきたことはシンプルです。藪をきれいにして、向こうの方まで見えるようにする。元気な木は伸ばす。オープンエリアになると、この森で育った実生の幼木を移植して、移植した周りの下刈りをします。下刈りの際、松木さんの力が発揮されます。ちょっと見ないぞという芽を残すのです。ここでも実際に奥の方にエノキがあったのですが、この辺りにはエノキはほとんどありません。小さい状態で「何だろう、分かんねーのが生えてきたぞ」って、刈るのを避けて育てて見たらエノキでした。だから、今では山菜だけでも 137 種類あって、たくさんの植物が戻ってきました。一斉に下刈りしてしまっただけで、ただ更新するだけなので、何時まで経っても森の姿は変わりません。

森の再生とともに、カタクリ、オオスズメバチ、タイコウチ、オニヤンマ、カエル、カワセミ、キビタキ、フクロウなど森の住人が戻ってきました。また、森の再生の一環で大きな池を掘ったり、水路も掘っています。水路を造成したその翌年から水生生物の調査をしていますが、トンボの数だけで比較すると最初 3 種だったのが、6 年後には 37 種になりました。トンボは、ニッチがかなり明確な生き物なので、少なくとも細かいニッチがその場所に 11~12 ぐらいは整っているということです。生き物のための森づくり、生き物を正直に見て、感覚としてはその生き物たちに僕らがマイクを向け、この森の住み心地はどうですかと質問をする、生き物が答えてくれたことを皆さんにお伝えするというイメージで調査を実施しています。

森にはアンブレラ種のツキノワグマも戻ってきました。ツキノワグマが来てくれるのは大歓迎ですが、人との軋轢を考えるとただ喜んでいられるだけでは駄目です。ずいぶん前になりまされど、ここに出てきた 3 頭を捕まえて発信機を付け、テレメトリーで追いましたが、幸いなことに畑には出てきていないことが分かりました。

◆ アファンの森での活動や調査は、財団法人を設立して続けられているのですね。

アファンの森の活動を始めた当初、私は森の入口付近の高台に家を建てようと考えていました。それで道を入れたんです。私は変な人だから、お客は大好きだけど、いつも一緒にいるのは嫌だから、入口近くにゲストハウスを作りました。ゲストハウスは今は財団のもので、調査に来る人たちに使ってもらっています。財団の名前は『財団法人 C. W. ニコル・アファンの森財団』といい、2002 年に設立しました。ゲストハウスの中にはロフトがあって、薪ストーブに洋式のトイレ、お風呂は和風にしてあります。でも、財団を作るために 20 年ぐらいかけて儲けたお金を全部投入しましたから、今でも家内は私を許していません。(笑)



左奥に見えるのがゲストハウス

財団の活動は、アファンの森を広げるためのトラスト活動の他、「森をそだてる」森林整備、「森を知る」ための調査研究、「森を世界につなげる」国際交流（姉妹森¹）、「森を伝える」普及活動、「森の人を育てる」人材育成、「森が心を育む」5 センスプロジェクト²の大きく 7

¹ 世界初の姉妹森提携をした日本のアファンの森と英国ウェールズのアファン・アルゴード森林公園。森を通じての国際交流活動は、森林環境や森にまつわる人の暮らしについて、国の枠を超えた情報交換や文化を行っている。

² 5 センスプロジェクトのひとつとして、アファン“心の森”プロジェクトが実施されている。児童養護施設で暮らす子どもや盲学校に通う子ども達が参加している。虐待などによって心に傷を負った子ども達や、体に障害のある子ども達が、命の環でつながっているアファンの森で、全身を使い遊び楽しむことで、自分自身もかけがえのない一員であることを感じてもらうプロジェクト。



つからなっています。

去年の今頃は雪が積もっていましたが、今年はまだなめこが出ています。明日だれか来させて採りたいと思います。私は、いま流行っていますが、以前から日本の里山の手入れは素晴らしいと思っています。森林管理の方法は、ヨーロッパをはじめ世界中にあります、日本が一番優れていると思います。アフアの森では、部分的に藪を残しています。人の手を入れない藪がいいと思っている人がいますが、全部藪だったらタカとか大きな鳥が飛べないですし、第一樹木の成長が止まってしまう。あと、二股になった木の片側を伐って家具にしています。片側を伐ると残ったほうはうんと元気になるし、周りにある木も助かるんですよ。



二股の片側を伐った樹木

森の中には水が湧いているところがあります。湧き水は美味しです。特にうちのカエルは礼儀が正しくて、湧き水を溜めている場所から出ておしっこするようです。(笑)

森の中で人が集まるところはチップを敷いています。利用者が増加して、当初緑に覆われていたところが踏みつけられて真茶々になったんです。森が駄目になったら本末転倒だろうといろいろ考えた末にチップがよさそうだという結論に至りました。このチップも他所から運んでくる訳ではなく、この中で間伐したものをチップにして、ボランティアの方に敷いてもらっています。深さは20cmぐらいでしょうか、下の方は半分土になっています。



人の集まるところに敷かれたチップ

最初の10年ぐらいは、間伐した樹木は松木さんが現場で燃やしていました。森を綺麗にするためですから理解はできますが、ウェールズでは必ず政府の連中が来て、燃やさない方がいいといいます。生物がその中で住めるから、病気がなければ燃やさないで束ねた方がいい。そのうちに土に帰ります。



間伐した枝は束ねて置かれている

本当は森の中にもっと藪を残したかったんです。ある時私が一人で森を歩いていたら、この辺りですごく動物のおいがしました。藪の中でクマが昼寝をしていたんです。だから本当はこのエリアは伐り過ぎだと思ってますが、子どものプログラムがありますから伐らざるを得ませんでした。これは松木さんと私の議論しているところです。ただ伐り過ぎても後20年ぐらいすると良い木が育ちます。ここを通っている道は、チャールズ皇太子が2年前に来られた時、時間が限られていたので、もともとクマの道であったところを整備しました。“チャールズ通り”と呼んでいます。



“チャールズ通り”(もとクマの通り道)



◆ サウンドシェルター

ここは私が一番好きな場所です。敷物とシュラフを持ってきて、夜には火を焚き蝋燭を立ててよく野宿をします。夜はカエル、早朝は小鳥の合唱団を楽しめて、みんな帰りたくなくなるところです。

またここは、ストーリーテリングの場所として最高です。人間は炎をみると、脳波がアルファ状態になります。特に虐待を経験したなどトラウマを持つ子供はなかなか落ち着かない子が多いのですが、この場所は後と横が守られていて、前面に炎があるから落ち着くんです。

このシェルターのおかげで、普通は大きな声を出さないと聞こえない距離からでも、小さな声ではっきりと聞こえます。人間どおしが隣り合って座る際、昼間はある程度の距離をおきますが、大昔から夜は火を見ながらくっつきます。夜は、炎があるから私の顔を見なくてもいいし、ストーリーテリングのデザインとして勲章をもらうべきだと思います。(笑) このデザインは国立公園などで使えると思います。もともとこのデザインは、カナダの北方民族がトナカイのために使っていたシェルターを参考にしました。

私は、以前北方民族のハンター4人とトナカイの移動を待って、3週間過ごしたことがあります。その間、一言も喋っちゃいけない。鉄砲のチェックも音を立てないようそっと行きます。トナカイは人間の声を聞いたら駄目です。大自然の中では山火事はありますから、煙の臭いは大したことはありません。ただ炎を見ると逃げるんです。だから反射板で炎を隠します。その経験が大変だったかと聞かれたら、それは楽しかったんです。喧嘩も何もないし、人の気持ちが良く分かりました。私はノートを書いたりスケッチしたり。その間ずっと、何万匹のトナカイがどこに来るかみんなに聞いていました。大きな川の横に分散したキャンプがいくつかあったんです。ある時10キロぐらいはなれたところから、風のような遠いジェットエンジンのような、雷のような音がしたんです。群れが動いているんです。大きな川を渡るからトナカイのリーダーたちは物凄く敏感です。それで運よく我々のところの近くで、トナカイのリーダーが川に入って泳ぎ出しました。リーダーが入ったら何があってもみな付いて来ます。若い人が他のハンターを呼びに行きトナカイを捕り始めました。

そんな経験をもとに私が考えて作ったサウンドシェルターは、トタンやブルーシートではなく、木材と樹皮といった自然の素材を使っています。以前、チャールズ皇太子をご案内した際、「いいね！」と聞いて感心してくれました。



サウンドシェルター



ストーリーテリングの実演をするニコルさん



◆ アファンセンターと『森に開かれた窓』の取組

これからアファンセンターに行きます。この10月に完成したセンターは、より多くの人々が集い、語り合い、夢や理想を分かち合う機会を増やそうとしたつくったものです。センターの材は、すべて国産です。周辺にはたくさん木がありますが、伐り出すシステムが死んでしまっているので、残念ながら隣の県などから運んできました。アファンの森の材は、センター内のテーブルや椅子へ生まれ変わっています。石垣に使っている石は、洪水で流された地元のもので、石と石の間には料理に使うハーブをはじめ、スマレ、シダなどを植え始めました。あと3年ぐらいで全部緑色になるでしょう。

アファンセンターに行く途中に新しくたっているポールは、株式会社インテージ社が50周年記念に設置したライブカメラです。秋葉原にあるインテージ社の本部には、大きなロビーがあって100インチのディスプレイにアファンの森のライブ映像が映し出されています。私が望んでいるのは、1年ぐらいたらウェールズのアファンのセンターと繋げ、子供や若者がリアルタイムで会話ができるようにすることです。将来にはインターネットを通じ、実践活動をしている森どうしを繋げ、森の国連みたいなものを作りたいですね。



アファンセンター



アファンセンターの石垣に植えられたハーブ



設置されたばかりのライブカメラ

2010.12.2 インタビュー

聞き手：田村省二（中部生物多様性主流化チームリーダー）



C.W.ニコル

- ・ 英国南ウェールズ生まれ。17歳でカナダに渡り、その後、カナダ水産調査局北極生物研究所の技官として、海洋哺乳類の調査研究に当たる。以降、北極地域への調査探検は12回を数える。
- ・ 1962年に空手の修行のため初来日。
- ・ 1967年より2年間、エチオピア帝国政府野生動物保護省の猟区主任管理官に就任。シミエン山岳国立公園を創設し、公園長を務める。
- ・ 1972年よりカナダ水産調査局淡水研究所の主任技官、また環境保護局の環境問題緊急対策官として、石油、化学薬品の流出事故などの処理に当たる。
- ・ 1980年、長野県に居を定め、執筆活動が続けるとともに、1986年より、森の再生活動を実践するため、荒れ果てた里山を購入。その里山を『アフンの森』と名付け再生活動を始める。
- ・ 2002年、『アフンの森』での活動や調査等をより公益的な活動を全国展開するために、「財団法人C.W.ニコル・アフンの森財団法人」を設立し、理事長となる。
- ・ 1995年7月 日本国籍を取得。
- ・ 2005年： 英国エリザベス女王陛下より名誉大英勲章を賜る
- ・ 1993年～ 国際松濤館空手道連盟顧問
- ・ 1993年～ (財)屋久島環境文化財団特別顧問
- ・ 1994年： 内閣官房「21世紀地球環境懇談会」委員
- ・ 1995年～ 学校法人東京環境工科学園理事・実習場長
- ・ 1997年： 内閣官房「子どもの未来と世界について考える懇談会」委員
- ・ 2002年： 内閣府「未来生活懇談会」委員
- ・ 2003年～ 東京都 エコツーリズム・サポート会議委員
- ・ 2003年～ 環境省 エコツーリズム推進会議委員
- ・ 2005年～ 京都大学フィールド科学教育センター社会連携教授

